



会社帰りの 手芸教室



greentea0117

会社帰りの手芸教室

会社帰りに手芸教室に通っている。無心に手を動かしていると、会社でのストレスを忘れる。私が教室に通っていることは誰も知らない。私だけの息抜きの場だ。

その日は出来上がった作品を鞆に入れ、ご機嫌で帰宅した。ビールを飲み風呂に入り、健やかな眠りについた。

次の日、その作品を鞆に入れたまま、出社した。誰に見せるでもない、ささやかな私の楽しみ。昼休みにはそれを取り出して、ふわふわと触ってみたりした。短めのマフラー。片方の端がループ状になっていて、もう片方の端を入れて首に巻く。茶色で、緑色のアスタリスクをところどころ刺繍した。暖かい。

翌週、教室へ行くと、スーツを着たサラリーマンらしき人が、席に着き、不器用に手を動かしているのが驚いた。

「手芸に興味があるそうよ」

先生は言った。私はその人の斜め向かいに座った。マフラーを作り終わったので、次に何を作ろうかと胸躍らせていた。この教室のいいところは、編み物、縫い物など、何か一つの手芸に特化していないところだ。先生は分厚いファイルをもっている。様々な作品のレシピだ。その出来上がりの写真を見ながら、これと思ったものを選び作ることができる。作っている途中でどうしてもわからないところは必ず出てくる。おしゃべりをしながら、教えてもらいながら、気に入りの作品を少しずつ作っていく。

次はどの作品を作ろう、うきうきしながらファイルをめくる。めくりながら、針と糸で格闘しているサラリーマンの方を見る。内心少し、憤慨していた。女性ばかりだから気楽なのに。それに手芸なんてその人に全然合っていないように思えた。趣味が欲しければ、ランニングとか、魚釣りとか、そういうことにしておけばいいのに。

「矢代さん、そうそう、縫い目は大きくならないようにね」

先生がその人の手元を覗き込んで言った。よくよくみれば、その人はなんとティッシュケースを作っているようだ。一番簡単な裁縫作品と言えばそうだが、男の人がティッシュケースに一体、何の用があるのだろう。

まあいい。私はファイルにある色とりどりの作品に目を奪われた。この教室に通い始めて三年目。ある程度、難しいものにも挑戦できるようになってきた。セーターでも編んでみようか。編み物はあまり得意じゃないけれど季節柄、新しいセーターが欲しいし、うまくいけばこの冬、自分で作ったものを着られるかもしれない。

私は編みこみのある茶色いセーターを作ることにした。私にとってはちょっとした挑戦だが、まあこつこつやっていたら今年の冬には間に合わなくても、来年は着られるだろう。そう気楽に

構えて編み棒に毛糸を取り付けていると、先生が、

「みなさん」

と呼びかけた。大体の生徒が集まったところだった。

「今日から入会する、矢代さんです。矢代さん、よかったら自己紹介どうぞ」

ティッシュケースと格闘していた矢代さんははっと顔を上げ、立ち上がった。

「あ、どうもすみません。矢代です。場違いとお思いでしょうが、どうか片隅に置いてやってください」

と言ったので、ちょっと笑い声が起った。

「昔から指先が不器用でして……サラリーマンで指先を使う仕事は無く、このままだと一生不器用なままです。器用になりたいくて。それになにか新しいことを始めたくて

私は矢代さんの気持ちが少しわかる気がした。スポーツは苦手だけど、あえて野球教室に行く、とか。子供のころは苦手なことはできるだけしたくないし、格好悪いところを見せたくないけれど。大人になると、いままでずっとしなかった苦手なことをあえてすることで、自分の中の何らかの扉が開くような気がする。でもだからといって、ティッシュケース……。ちょっと笑える。

とっつきやすそうな雰囲気だったので、みな矢代さんの周りに集まってきた。私はその斜め前で編み棒を動かしていたが、矢代さんはそれを見て、

「いやーすごい」

と呟くように言った。

「いやー」

私は言った。

「例えるなら、男の子がわけなくリフティングできるのを、女子がすごいと思う感じなんじゃないですか」

「あー、あ？ うんうん、そうかもしれない」

矢代さんは少し混乱した様子でうなずいた。

「いつかそんなふうに思った通り作れるようになりたいですよ」

「わたしだって別に、思った通り作れたりするわけじゃないですよ」

私は手を止めることなく言った。それにしても物を作りたいなら、陶芸とかあるだろうに、なんでまた手芸なんだろう、ときどき矢代さんの手元を見ながら思った。

できかけのティッシュケースに針をさして自分の棚にしまい、矢代さんは帰っていった。私も自分の棚に、編みかけのセーターを入れる。家に持って帰ってさくっと仕上げってしまう人もいるけど、私にとって手芸教室はいつもと違う時間を過ごす場所、いわば異空間なのだ。作品を家に持って帰ってしまっは、その新鮮さが薄れる。

次に教室へ行ったら矢代さんはやはりもう来ていて、今日は背広を脱いでティッシュケースと格闘していた。私を見ると、どうも、という感じで頭を下げた。私も棚から編みかけのセーターを取り出し、続きを編む。

「あら南部さん、そんな隅に座って」

先生が入ってきて言った。

「ああ、ちょっと集中したくて」

私が言うと、

「やっぱり男なんか入ってきたら、お邪魔ですかね」

と矢代さんが言った。

「あら、そんなことないわよ。新しいメンバーが入ってくるのはいつだって歓迎よ。男性だろうと、女性だろうと。ねえ」

先生が言ったので、私もうなずいた。

「そうですね。私なんかは、会社以外の場所が欲しくてここに来てるんです。もし、会社の人がここに入ってきたら、それは嫌ですけど、新しい人が入ってくるのは歓迎ですよ」

と言った。矢代さんはそれを額面通りに受け取ったらしく、

「そうですか」

とほっとした表情になり、自分のティッシュケースに戻っていった。

帰りの電車は、矢代さんと一緒になった。

「矢代さんあのティッシュケース、できたらやっぱり使うんですか？」

私は聞いてみた。

「え？　そうですね。せっかくなので使います」

「そうですか」

「矢代さんは？　やっぱりあのセーターは、誰かへのプレゼントなんですか？」

はあ？　思ってもないことを聞かれた。

「いえ、違います。自分のために編んでます。今年の冬には間に合わないかもしれないけど、来年なら着られると思うし」

「そうですか」

なんとなく言い返されたような気分になって、つり革につかまる矢代さんの横顔を睨んだ。その顔は若く無頓着で、どんよりとした疲れの漂う車内の中、一人だけ妙に浮いて見えた。